

記者発表（資料配付）				
月／日（曜日）	担当課・係	TEL	発表者名	その他配布先
3月19日（木）	文化財課 文化財班	（内線）5762 （外線）078-362-3783	課長 山下 史朗 副課長 甲斐 昭光	文化庁

重要文化財（美術工芸品）の指定について

1 発表概要

国の文化審議会（会長 さとうまこと 佐藤信）は、令和2年3月19日（木）開催の同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、4件の美術工芸品を国宝に、37件の美術工芸品を重要文化財に指定すること、また、1件の美術工芸品を登録有形文化財に登録することについて、文部科学大臣に答申する予定です。

このうち、重要文化財に指定される美術工芸品（絵画）2点が、兵庫県ゆかりの作者によるものになります。

2 答申される美術工芸品

名称	所有者	所在地	員数	時代
紙本金地著色 夏秋溪流図（鈴木其一筆／六曲屏風）	公益財団法人 根津美術館	東京都港区南青山 6-5-1	一双	江戸時代
室君（松岡映丘筆／大正五年／絹本著色六曲屏風）	公益財団法人 永青文庫	東京都文京区目白台 1-1-1	一双	近代 大正五年

3 兵庫県ゆかりの作者について

○鈴木其一（1795/96～1858）

姫路藩酒井家家臣鈴木家の家督を嗣ぎ、一代絵師として姫路藩に召し抱えられる。

○松岡映丘（1881～1938）

兵庫県神東郡田原村（現在の神崎郡福崎町）に生まれた日本画家。

4 その他

今回答申を受けた文化財の一部は、令和2年4月21日（火）から5月10日（日）まで東京国立博物館本館（東京都台東区上野公園13-9）にて、特集「令和2年新指定国宝・重要文化財」展で公開されます。

2. 重要文化財（美術工芸品）の指定

＜絵画の部＞

（有形文化財を重要文化財に 6件）

- ① しほん きんじちやくしよくなつあきけいりゆうず 紙本金地著色夏秋溪流図 すずき きいつ 鈴木其一筆
六曲屏風

一双

【所有者】公益財団法人根津美術館（東京都港区南青山6-5-1）

【法量】各 縦165.8cm 横363.3cm

すずき きいつ 鈴木其一（1795/96～1858）は江戸で活躍した絵師。早くから江戸琳派の大成者・酒井抱一（1761～1828）の事実上の後継者と評価されていたが、近年の研究で江戸時代後期を代表する個性的な絵師として再評価されるに至った。本図は江戸琳派の支援者であった江戸の油問屋・大坂屋松沢家に伝来したもので、らっかん落款の様子から40歳代後半の作と考えられる。この時期、江戸琳派の枠を突破して、其一独自の画域に到達した。金箔地に鮮やかな青色の水流がとくに印象的な本図は、其一の特質を最もよく示した大作である。

（江戸時代）



議案別紙三（有形文化財を重要文化財に指定することについて 六件）

一 紙本金地著色夏秋溪流図 鈴木其一筆
六曲屏風

一双

東京都・公益財団法人根津美術館

（寸法） 各 縦一六五・七センチメートル 横三六四・二センチメートル

（品質形状） 各 紙本金地著色 屏風装 本紙紙継二枚（上から一三一・三、三四・四センチメートル）

無背景の画面の下半に、左右隻に連続した地面と溪流を設定し、右隻は直立する五本の檜の合間に白い花をつける百合と葉の周縁が白い笹を描く。檜の幹に一匹の蟬がとまる（第三扇上部）。土坡の緑は青々とし、岩に覆いかぶさるように茂る。夏の景観である。左隻はやはり直立する七本の檜の合間に、ほとんどの葉を落とした桜紅葉と、枯れかけた羊歯、若干の小草を描く。檜の葉が一部枯れ始め、土坡の緑色も若干くすんだ秋の景観で、一枚の桜の葉が落ちて流れ去る瞬間をとらえる。

背景は約十一センチメートル四方の金箔を貼り込めて総金地とする。土坡の草に覆われた部分は右隻では鮮やかな緑色に左隻ではやや黄味の強い緑色に、土の露出する部分は金色に、水流に削られて露出した岩は墨の濃淡であらわす。岩肌表面には深い青色と緑色が薄く塗られ、苔が散りばめられる。水流は鮮やかな青色で、金色の線描で波紋をあらわす。檜の幹は薄茶色を地に墨の濃淡と抑揚のある墨線で、桜の幹は灰色を地に墨の濃淡と抑揚のある墨線で描き分けられる。ともに樹幹には苔が

散りばめられる。檜の葉は青味がかつた緑色で、左隻の枯葉は褐色で細かに描き重ねられる。桜の葉は墨の輪郭を用いず、ぼかしを多用して色づき具合を葉ごとに描き分け、葉脈は金色の線描であらわす。百合の茎、葉、花卉は濃墨線で括る一方で、蕊は輪郭線を用いない。百合の葉脈も金色の線描であらわす。笹の葉は輪郭と色の境界を墨線で括り、中心部を明るい緑色、外縁部を白色で塗りこめて、葉脈をあらわさない。羊歯は、没骨のたらしこみで描く。

右隻の画面右下と左隻の画面左下に落款がある。

保存状態は良好で、絵具の変褪色もほとんど進行していない。後世の補加筆もほぼ認められない。

〔款記・印章〕 噲々其一「祝琳」（朱文方印）

〔筆者〕 鈴木其一（二七九五／九六～一八五八）

〔時代〕 江戸時代

〔説明〕

鈴木其一（一七九五／九六～一八五八）は江戸時代後期に江戸で活躍した絵師である。諱を元長、号を其一といい、噲々、菁々などの別号がある。出自は江戸の紺屋とも幕臣の家の関係者ともいい、十八歳で酒井抱一（一七六一～一八二八）の弟子となったと伝える。兄弟子である鈴木蠣潭（一七九二～一八一七）の急

死を受けて婿養子として姫路藩酒井家臣の鈴木家の家督を嗣ぎ、江戸の抱一邸の近くに居を構えて親しく抱一の薫陶を受けた。茶道や俳諧にも通じ、各界の文化人と幅広く交流した。文政十一年（一八二八）に抱一が没すると、翌年には一代画師として酒井家に召し抱えられる。以後、抱一の後継者・酒井鶯蒲（一八〇八～四一）を支えながら精力的に画作と後進の育成に励んで江戸琳派の次代への継承を促すが、安政五年（一八五八）コレラに罹って死亡した。

其一の画風は、光琳を慕った抱一の様式を引き継ぎつつ、卓越した画技を駆使してそこに一層の洗練を加えたもので、早くから抱一の事実上の後継者と評価されていた。加えて昭和五十年代以降の研究では、そこに其一独特の感性や他流派から刺激を受けた要素が柔軟に組み合わされていることが明らかとなり、其一は江戸時代後期を代表する個性的な絵師として再評価されるに至った。

本図は其一を含む抱一派の支援者であった大坂屋松沢孫八（江戸有数の油問屋）の家に伝わったもので、詳しい制作経緯は不詳ながら、落款に見える「噲々」の使用時期と書体から、天保年間（一八三〇～四四）末ころ、四十歳代後半の作と考えられる。この時期、其一は西国諸国を旅して画囊を豊かにし、さまざまな流派の要素を積極的に採り入れ、独自の画域に到達した。

金地に鮮やかな緑色と青色がとくに印象的な本図は、抱一の「紙本銀地著色風雨草花図」（昭和十五・五・三指定、東京国立博物館）を強く意識しつつ、『光琳百図』にも収録された光琳の檜図屏風など、先行する宗

達光琳派の図様や表現に自在な変奏を加えたものである。全体としては琳派らしく広い色面を大胆に配置して華やかな画面を構成し、モチーフや絵具の色味を選んで繊細に季節感を表出するなど、意匠化された表現と写生的な表現を両立させている。

一方、両隻を通じて黒々とした岩肌を見せる地面が明確に設定され、そこにしつかりと根を張る植物と地面を削る溪流は、琳派作品としてはむしろ異例に属する迫力ある空間を構成する。また細部では、琳派に特徴的なたらしこみ技法は積極的には使用されず、多彩な描法を使い分けることで抱一とは別趣の实在感に富んだ描写を見せる。こうした本図の表現には、其一が意識的に琳派の枠を突破しようとしたことが看取される。そこには西国旅行で各地の溪流を写生した経験が活かされていることが指摘されており、円山応挙「紙本着色保津川図」（昭和十五・五・三指定、京都・千總蔵）への対抗心や、葛飾北斎の版画「諸国滝廻り」からの刺激、谷文晁への追慕が指摘されうるような、抱一の亜流にとどまらない其一の特質がもつとも明確に提示された個性的な作品となっている。其一の画歴の中でひとつの画期をなす大作であり、研究史においても昭和五十二年の本図の再出現が其一再評価への転機となったと言えることができる。

以上、本図は鈴木其一の代表作であり、江戸琳派のみならず、江戸時代後期絵画史を語る上で欠かせない優品として高く評価されるものである。

(指定基準) 一 各時代の遺品のうち製作優秀で、我が国の文化史上貴重なもの。

(参考) 平成二十〇二十一年度修理(株式会社墨仁堂)

(伝来)

『松沢家蔵品入札目録』(東京美術倶楽部、大正七年十二月五日売立) 所載

『溪舟居所蔵品入札目録』(開華楼、昭和十二年十二月十四日売立) 所載(「大孫伝来」とあり)

昭和十五年一月、根津嘉一郎遺族より財団法人根津美術館へ寄贈

(参考文献)

辻惟雄 「鈴木其一筆夏秋溪流図」『国華』九九七、昭和五十二年

河野元昭 「鈴木其一の画業」『国華』一〇六七、昭和五十八年

安村敏信 「蠹くものいる風景―其一筆「夏秋溪流図屏風」をめぐって」『琳派』二、紫紅社、平成二年

玉蟲敏子 『都市のなかの絵―酒井抱一の絵事とその遺響』ブリュッケ、平成十六年

東京国立博物館 「大琳派展 継承と変奏」図録、平成二十年

萩原沙季 「鈴木其一筆「夏秋溪流図屏風」についての一考察」『京都美学美術史』十、平成二十三年

『日本美術全集』十三、小学館、平成二十五年

サントリー美術館ほか「鈴木其一 江戸琳派の旗手」展図録、平成二十八年
東京都美術館「奇想の系譜」展図録、平成三十一年





② ^{まつおかえいきゆう} 松岡映丘筆 大正五年
^{むろぎみ} 室君 絹本著色 六曲屏風

一双

【所有者】公益財団法人永青文庫（東京都文京区目白台1-1-1）

【法 量】各 縦172.5cm 横379.8cm

^{まつおかえいきゆう} 松岡映丘（1881～1938）は現在の兵庫県神崎郡福崎町出身の日本画家。^{ふくざきちゆう} 絵巻の古典などの表現を近代絵画に順応させた画風を確立し、日本画の大家を多く育てた。本作はその代表作で、故郷播州の港町、室津が鎌倉時代に衰退し、遊女が味気ない日々を送る悲哀を主題とする。道具類のデザイン、波の描き方などは古美術を学んだもの。静かに雨の降る様を巧みに描く詩情豊かな名作として多くの画家に絶賛され、その後の日本画に多大な影響を与えた。

（近代）



二 室君 松岡映丘筆 大正五年
絹本着色 六曲屏風

一双

東京都・公益財団法人永青文庫

(寸法) 各 縦一七二・五センチメートル 横三七九・八センチメートル

(品質形状) 各 絹本着色 屏風装

雨の降るなか、薄物の衣を着し屋内で過ごす四人の遊女と庭先を描く。室内は床板上に畳が敷かれ、右隻の右から順に畳に頬杖をつき冊子を読む橙の衣(二重格子文)の遊女、双六盤に肘をつき手拍子を打つ青の衣(鹿の子文)の遊女、柱に寄りかかり右手に持つ扇で拍子を打つ薄紫の衣(巴文)の遊女を、また左隻には広げた扇を左手に持ち、縁側近くで寝そべり盆山ごしに庭を眺める赤い衣(鹿の子文)の遊女を描く。

右隻は室内を中心に描き、右端の前景には若竹を描く。画面中央に柱を配し、その右方の貫には二つの簾を並べて掛ける。うち右側は下され、簾ごしに室内をのぞく構図とする。室内は、画面右方に二面の襖(円文を配する紫の縁をまわし、水波を描く)を、画面奥側に縁と開かれた舞良戸を描く。床板上には、赤の袴と水色の衣(雲文)をかけた漆塗りの衣桁、青の五爪に唐花文を配する浅葱色の宿直袋を置く。橙の衣の遊女の開く冊子は青の表紙で、蝶鳥下絵料紙にかな文字を配する。青の衣の遊女は松喰鶴文の螺鈿双六盤に肘をつき、葦手絵を描いた扇を双六盤に立てかける。薄紫の衣の女性の傍には鼓が置かれる。左隻は対角線上に縁側を配し、右半に室内を、左半に庭先を描く。縁側には金銅水瓶を入れた漆塗りの角盥が置かれ、赤い

衣の女性の前には木製花台と青白磁鉢の盆山が並ぶ。庭には蔦の絡まる網代垣、竹垣にかこまれた萩、薄、撫子などの前栽を描く。

左右隻ともに後方には水面が見え、左隻右上に三艘の舟が浮かぶ。画面全体に細線で雨を描き、屋根および庭の地表近くを中心に薄い絵具を重ねて靄をあらわす。

右隻の画面右下に落款・印章がある。

画面の各所にシミが生じている。

〔款記・印章〕 (右隻) 映丘絵「麻通袁珂」(朱文方印)

〔筆者〕 松岡映丘(一八八一〜一九三八)

〔時代〕 近代 大正五年(一九一六)

〔説明〕

松岡映丘(一八八一〜一九三八)は兵庫県神東郡田原村(現在の神崎郡福崎町)に生まれた日本画家で、本名を輝夫という。橋本雅邦、山名貫義への師事を経て東京美術学校で日本画を学び、大正元年(一九一二)の第六回文部省美術展覧会(文展)入選以来、官展や金鈴社展(大正六年開始)などを舞台に活躍した。兄

に国文学者の井上通泰、民俗学者の柳田國男、言語学者の松岡静雄らがあり、彼らの助言も得ながら学術的な見識を深め、みずからも古画の考究を進めたことで知られる。官展の審査員を歴任したほか、東京美術学校や家塾での指導下に次代を代表する日本画家を多く輩出し、新興大和絵会（大正十年創立）や国画院（昭和十年創立）を主導するなど、画壇を代表する一人であった。大和絵の古典の諸要素を近代絵画に順応させた、格調高く色彩豊かな画風を確立し、日本画の展開に大きな足跡を残している。

本作は、大正五年（一九一六）の第十回文展で特選主席となった映丘の代表作である。播州の港町、室津の遊女を題材としており、映丘自身の解説によれば、鎌倉時代に室津が衰退した頃の光景であるという。遊女が歌うのは催馬楽であるともいい、絵画化されることが稀な題材を幅広い学識に依拠して描いた作品となっている。遊女の装いや器物、水波や草花の描法などについても、映丘は伝世品の意匠、古絵巻の描写に学びつつ、直接的な引用とまらないよう巧みに翻案している。

細部まで謹直な線描や彩色には映丘の高い画技がよく示され、特に濃彩を多用しながら品格ある画面にまとめる点は、高く評価されるところである。画面の大部分は緊張感のある筆線と面的な賦彩により構成されるが、螺鈿や盆山、遊女の着衣などの細部では、描こうとする素材の質感をふまえ多岐にわたる描法が選択的に用いられる。特に遊女の肉身には控えめな彩色によって陰影が表現され、画面の調和を保ちつつ群像の存在感を増すことに成功している。また、雨の流麗な直線、軒先の雨垂れや、煌めく靄、草花に滴る雨粒、

複雑な線の組み合わせによる細波など、静かに雨が降るさまの描写は出色である。

映丘は、衰微した港町の遊女が味気ない月日を送る悲哀を本作の主眼と説明する（『帝国絵画宝典』大正七年）。これを表現するために能面を参照したといい、また本作の着想について、以前から郷里の室津の小波を描きたいと思っており、五月雨や梅雨の音もなく降る雨に女性を配したいと考えたと述べる（『東京朝日新聞』大正五年十月二十三日）。発表時の批評では、古画に学ぶことにより品位を高める点に加え、古画の直接的な応用に留まらない、創意に富んだ情趣豊かな作品である点に評価が集まった。映丘の画歴においてもこうした趣向は初めての試みで、文展で評価を得られないとする映丘の不平を聞いた兄の井上通泰による、一度は調子を変えるべきという助言を背景に持つことが知られる（『美術日本』六一九、昭和十五年）。

本作については、絵巻に代表される大和絵が近代絵画における新機軸の基盤となり得ることを示した作品と繰り返し論じられた。感化されたのは門下の画家に限定されず、「文展に対する世間の人気が絶頂に達した当時の好評作だけに其絵を見なければ話も出来ないといふほどに騒がれた作品」（『東京朝日新聞』大正十三年九月四日）、「ひとり作者の傑作であるばかりでなく、新解釈の大和絵として後進に範を垂れた、事実明治大正の名作」（『現代作家美人画全集』日本画篇上、昭和七年）など、時代を代表する名作という評価も早くに確立された。

以上のように本作は、画壇を牽引した松岡映丘の代表作であるとともに、多大な影響力を持ったその作風

が確立されるうえで重要な位置を占めている。近代日本画において大和絵の表現に新たな指針を示すとともに、発表時から一貫して重要視された作品であり、大正期を代表する傑作と評価されるものである。

(指定基準) 一 各時代の遺品のうち製作優秀で、我が国の文化史上貴重なもの。

(参考文献)

- 山種美術館 「松岡映丘―その人と芸術」展図録、昭和五十六年
- 姫路市立美術館 「松岡映丘」展図録、昭和五十九年
- 姫路市立美術館 「松岡映丘とその系譜」展図録、平成二年
- 練馬区立美術館ほか 「大正期の日本画 金鈴社の五人」展図録、平成七年
- 東京国立博物館ほか 「細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション」展図録、平成二十二年
- 練馬区立美術館 「生誕一三〇年 松岡映丘」展図録、平成二十三年
- 奈良県立万葉文化館 「松岡映丘 古典美の再興」展図録、平成二十七年









TOP KODAK

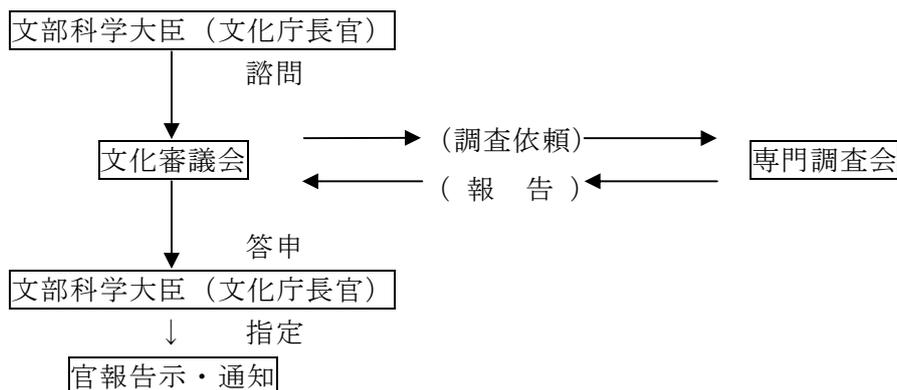
【資料】 答申が行われる重要文化財の概要

1 「美術工芸品」とは

建造物、**絵画**、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいる。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいる。

2 指定・登録・選択の流れ

○有識者で構成する文化審議会の「専門調査会」における専門的な調査検討を受け、文化審議会が文部科学大臣に答申し、国宝・重要文化財の指定を行っている。



3 統計資料

〈全国〉国指定の重要文化財 ※（ ）内は国宝で内数

	現在の指定数	今回の新指定数		累 計
		国宝	重要文化財	
美術工芸品	10,772 (893)	4	37	10,808 (897)
(内訳)				
絵画	2,031 (161)	0	6	2,037 (162)
彫刻	2,715 (138)	2	8	2,723 (140)
工芸品	2,469 (253)	1	3	2,471 (254)
書跡・典籍・古文書	2,690 (290)	0	10	2,700 (290)
考古資料	647 (47)	1	5	652 (48)
歴史資料	220 (3)	0	5	225 (3)

〈兵庫県〉国指定の重要文化財 ※（ ）内は国宝で内数

	現在の指定数	今回の新指定数		累 計
		国宝	重要文化財	
美術工芸品	363 (9)	0	2	365 (9)
(内訳)				
絵画	101 (2)	0	0	101 (2)
彫刻	106 (1)	0	1	107 (1)
工芸品	65 (2)	0	0	65 (2)
書跡・典籍・古文書	43 (3)	0	0	43 (3)
考古資料	47 (1)	0	1	48 (1)
歴史資料	1	0	0	1